

17. 種々の骨塩定量法の基礎的検討

三村 浩朗	友光 達志	柳元 真一
福永 仁夫	大塚 信昭	永井 清久
森田 浩一	古川 高子	村中 明
森田 陸司	(川崎医大・核)	
小野志磨人	西下 創一	(同・放)

今回われわれは、MD, SPA, DPA の3種の非侵襲的な骨塩定量法について比較検討を行った。

検討項目は、①精密度、②健康女性の骨塩減少率、③骨塩量増減に対する検出能、④各定量法によって得られた骨塩量値と年齢との相関、⑤各定量法における骨塩定量値の相関の5項目である。対象は健康女性(年齢、41歳～60歳)68例である。

結果として、精密度はSPAが1.73%と最も優れ、ついでMD, DPAであった。年間の骨塩減少率はDPAが1.25%と最も顕著であった。6か月以上の期間において2回の定量を行った8症例を用いた骨塩量増減の検出能は、DPAが優れていることが示された。また、骨塩量値と年齢との相関はSPAが最も優れ($r=-0.573$)、測定法間の相関ではMDとSPAの相関性が最も優れていた($r=0.660$)。これらの結果より、骨塩定量は2種もしくは3種の定量法を組み合わせ、末梢骨と軀幹骨双方の定量を行う必要性が示された。

18. CA 130 RIA の基礎的臨床的検討

藤井 崇	木村 良子	阿多まり子
渡部 弥生	宮川 直子	片岡 正明
河村 正	飯尾 篤	濱本 研
(愛媛大・放)		

CA 130 測定キット(第一ラジオアイソトープ研究所)を使用する機会を得、基礎的臨床的検討を行った。CA 130は肺腺癌細胞を免疫源として作製されたモノクローナル抗体により認識される糖蛋白で、これまでの研究よりCA 125と同一の抗原であり、Bastらにより作製されたモノクローナル抗体OC 125とは異なる抗原決定基を認識していることが明らかとなっている。今回の検討では、CA 130値と、CA 125値の著明な解離は認められず、ほぼ同一の意味をもつものと考えられた。本キットは従来のCA 125測定キットと比較して、インキュベーション時間が短縮され、操作も簡便、再現性も良好で、

臨床的にも有用と考えられる。

19. Pepsinogen I, II・IRMA KIT の基礎的、臨床的検討

森田 浩一	福永 仁夫	大塚 信昭
永井 清久	古川 高子	森田 陸司
(川崎医大・核)		
小野志磨人	梶原 康正	西下 創一
(同・放)		

ペプシノーゲン(PG)は、ペプシンの不活性前駆体であり、免疫化学的にPGIとPGIIに分類されている。今回、PGIとPGIIのRIAキット(PGI/PGII RIA BEAD, ダイナボット株式会社)を使用する機会が得られたので、その基礎的および臨床的検討を行った。対象は、健康者93例、胃十二指腸疾患102例および人工透析中の慢性腎不全症40例の計235例である。基礎的検討から、本キットはPG測定に十分な感度と再現性を有しており、また添加回収試験や希釈試験も良好な成績が得られ、十分臨床使用に耐え得ることが示された。

健康若年者群は、高年群に比してPGIIの低値が観察された。PG高値は消化性潰瘍や慢性腎不全にみられ、一方、PGの低値は胃ポリープや胃癌の一部、胃切除後に観察された。このように、本キットによる血中PGレベルの測定は、胃・十二指腸疾患における酸・ペプシン分泌の動態を知る上で有用な手段になり得ると考えられた。

20. 放射線肺障害動物モデルにおけるGaシンチグラムを経時的変化について

大道 和宏	中西 敏夫	下永田 剛
田妻 進	勝田 静知	(広島大・放部)

白色雑種家兎の片肺(右肺)に $50 \times 40 \text{ mm}^2$ の照射野を設定し、 ^{60}Co γ 線20 Gyを一度に照射して放射線肺障害モデルを作製し、屠殺することなく気管支肺胞洗浄(BAL)、 ^{67}Ga シンチグラム、動脈血ガス分析等を経時的に施行し、放射線肺障害の病態解析および各種パラメータの有用性について検討した。BALは照射側肺を生食40 mlで洗浄・回収し、総細胞数、分類の後、気管支肺胞洗浄液(BALF)中のTotal Protein, Phospholipidの含有量を測定した。 ^{67}Ga シンチグラムは、視覚的評価